桃太郎（36）

　鬼はその声を聞くと、ふるえ上がって、よけい一生懸命に、中から押さえていました。

　するときじが屋根の上からとび下りてきて、門を押さえている鬼どもの目をつつきまわりましたから、鬼はへいこうして逃げ出しました。その間に、猿がするすると高い岩壁をよじ登っていって、ぞうさなく門を中からあけました。

桃太郎（37）

「わあッ。」とときの声を上げて、桃太郎の主従が、いさましくお城の中に攻め込んでいきますと、鬼の大将も大ぜいの家来を引き連れて、一人一人、太い鉄の棒をふりまわしながら、「おう、おう。」とさけんで、向かってきました。

けれども、体が大きいばっかりで、いくじのない鬼どもは、さんざんきじに目をつつかれた上に、

桃太郎（38）

こんどは犬に向こうずねをくいつかれたといっては、痛い、痛いと逃げまわり、猿に顔を引っかかれたといっては、おいおい泣き出して、鉄の棒も何もほうり出して、降参してしまいました。

おしまいまでがまんして、たたかっていた鬼の大将も、とうとう桃太郎に組みふせられてしまいました。

桃太郎（39）

桃太郎は大きな鬼の背中に、馬乗りにまたがって、

「どうだ、これでも降参しないか。」

といって、ぎゅうぎゅう、ぎゅうぎゅう、押さえつけました。

鬼の大将は、桃太郎の大力（だいりき）で首をしめられて、もう苦しくってたまりませんから、大つぶの涙をぼろぼろこぼしながら、

「降参します、降参します。命だ

桃太郎（40）

けはお助け下ください。

　こう言って、ゆるしてもらいました。

　鬼の大将は約束のとおり、お城から、かくれみのに、かくれ笠、うちでの小づちに如意宝珠（にょいほうじゅ）、そのほかさんごだの、たいまいだの、るりだの、世界せかいでいちばん貴（とうと）い宝物を山のように車に積んで出しました。

つづく